

によって切られている。住居跡の規模は径約四・八メートルで、壁面下には周溝がめぐる。周溝内および床面上で出土した遺物からみて、弥生時代中期前半に属する住居跡と考えられる。

SK001は、A地区中央部のやや東寄りで見えられた小児用の甕棺墓である（第29図参照）。墓壙は検出面で長さ一・〇〇メートル、幅〇・四六メートルで、深さは〇・二九メートルである。棺は甕と甕との合わせ口式で、墓壙にほぼ水平に置き、全長は〇・九〇メートル、最大径〇・三九メートルを計る。

#### 遺跡の性格

当遺跡は発掘調査で確認された範囲外にも遺構の存在が予想されるが、弥生時代の中期前半から中葉にかけての比較的短期間であつた小規模な集落であることは確実である。この時期の新たな水田開発に伴う分村的性格の集落であろう。

小児用甕棺墓は金築遺跡や行橋市下稗田遺跡でも集落内に単独で埋葬される例があり、成人の共同墓地は他の隣接地域に分布すると考えられる。

#### 四 神手遺跡

神手遺跡は戒川によって開析された洪積台地の中流右岸の崖上平坦面で、徳永川の上遺跡の南側に隣接した位置にある。遺跡地は標高三二メートル前後にある。

周辺の弥生時代の遺跡としては、徳永川の上遺跡（集落と墓地）、源左工門屋敷遺跡（集落）、些見遺跡（集落）、カワラケ田遺跡（集落）が確認されている。これらの遺跡は神手遺跡を中心として半径約五〇〇メートルの範囲内に集中している。当遺跡の所在地は大字徳永字神手である。



第30図 神手遺跡全体図

### 調査経過と

### 遺跡の概要

調査対象地は水田や畑地となっていたが、一般国道一〇号椎田バイパスと、主要地方道権田・勝山線バイパスとの交差点部分にあたる。昭和六十一年に試掘調査が行われ、本調査は昭和六十三年二月五日から三月三十一日まで実施された。調査面積は一二〇〇平方メートルであった。検出された遺構は縄文時代から中世にまで及び、竪穴住居跡一軒・貯蔵穴一九基・古墳一基・集石墓一基・石棺墓一基・石蓋土壙墓一基・土壙墓一〇基・土壙二三基・落とし穴状遺構五基・溝状遺構一八条などがあつた(第30図参照)。このうち弥生時代に属する遺構は、竪穴住居跡・貯蔵穴・石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・溝などである。ただし、竪穴住居跡の一部は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にまで下るものもある。

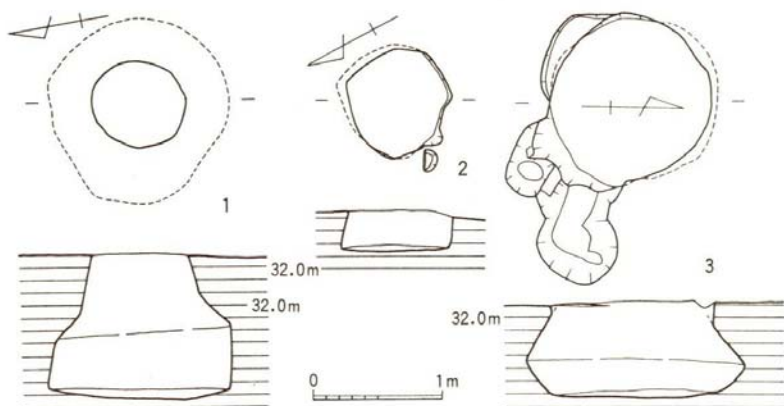
### 遺構の詳細

弥生時代の集落関係の遺構は、主として円形竪穴住居跡と貯蔵穴および溝からなる前期後半から中期前半にかけての一群と、後期後半を中心に古墳時代初頭にまたがる方形竪穴住居跡からなる一群とがある。

円形竪穴住居跡は1号竪穴住居跡のように壁体が完全に破壊され、円形にめぐる柱穴群だけが検出された住居跡が幾つかある。1号竪穴住居跡は調査区東北隅に位置する。後世の削平のため、壁体は全く残っており、円形にめぐる主柱穴は二〇本以上になるものと推定されるが、そのうち九本のみが検出された。これらの主柱穴群はほぼ径五メートルの円周上に配置されている。床面の規模は径七メートル前後のやや大形になると考えられる。

貯蔵穴はすべて床面の平面形が基本的に円形のもので、規模は床面径が〇・七メートルの小型のもの、径一・四メートルの中形のものがある。断面形態は床面よりもやや上方に最大径部がある、いわ

ゆる袋状のものが多いが、小形のものでは断面三角形になる傾向にある。しかし、ともに地表面（入り口）近くでは径が小さくなる。2号貯蔵穴（第31図1）は調査区中央よりやや東に位置する。平面形態・断面形態ともに、当地域の前期後半から中期前半にかけて最も一般的なタイプの貯蔵穴である。床面はややくぼみがちであるが、ほぼ平坦面に近く、長径一・四七メートル、短径一・三七メートルである。断面形態は入口部に比べて下部が膨らむ袋状をなし、床面から〇・四〇・五メートルの高さまで垂直に近く立ち上がる。それより上部の壁面は急激に内傾し、上部の検出面では径〇・七メートル前後まで狭まっている。遺構内から出土した壺・甕からみて、2号貯蔵穴は前期前半に属する。5号貯蔵穴（第31図2）は調査区中央よりやや東側に位置する。床面の平面形態はややいびつであるが、基本的に円形をなし、長径〇・八八メートル、短径〇・七八メートルと小形である。残存している壁面は床面から内傾しながら立ち上がり、断面は三角形で袋状をなさない。出土した甕の形態から、5号貯蔵穴は中期前半の遺構である。13号



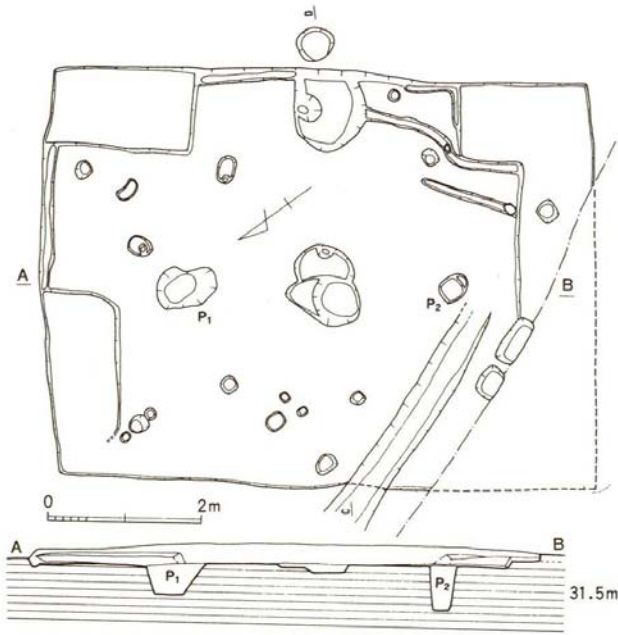
第31図 神手遺跡貯蔵穴実測図

貯蔵穴（第31図3）は調査区中央の北側に位置する。床面は平坦で円形をなし、長径一・二七メートル、短径一・二五メートルである。壁の最大径部は床面から約〇・三メートルの高さにあり、径一・七一メートルを計る。検出面での径は一・二メートル前後である。

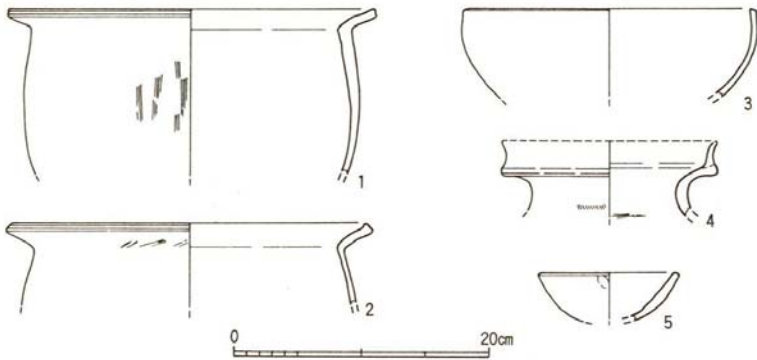
前期後半から中期前半にかけてのそのほかの遺構としては、円形竪穴住居跡や貯蔵穴群を囲むようにめぐらされた溝状遺構がある。2号溝状遺構は調査区北東部で、南北に走る断面「V」字形の溝状遺構である。検出した長さは三・四メートル、幅〇・五メートル、深さ〇・五メートルであるが、南北両方向に更に延びる。4号溝状遺構は調査区南端部で検出され、南方へ弧を描きながら、調査区外の北西方向と北東方向に延びている。確認された長さは二〇メートル、幅一メートル、深さ〇・六メートルを計る。2号・4号の溝状遺構は、幅・深さおよび断面形態が類似することから一連の溝状遺構と考えられる。

次に、後期後半に属する住居跡と埋葬施設について詳述する。6号竪穴住居跡（第32図）は調査区北東隅に位置する。床面の規模は、長さ七・二メートル、幅五・四メートルとやや大形で、平面形態が長方形をなす。床面中央部には炉跡があり、炉跡の長軸方向の両側には一对の主柱穴がある。また、南東側長辺中央部に接して屋内土壇があり、北東・南西・南東各辺の一部にはベッド状遺構が設けられている。6号竪穴住居跡は、出土した甕・二重口縁壺・碗形土器（第33図）から、後期後半から終末期の時期が考えられている。

1号石棺墓（第34図1）は調査区南西部に位置するが、盗掘などにより棺材は大部分抜き取られていた。棺内の長さ一・七五メートル、幅〇・四五メートル、深さ〇・一二メートルを計る。残存した西半部の蓋石は、片岩系であった。床面には粘土を張り、鉄器などが出土している。8号土壇墓（第34図2）は調査区南部で、9号土壇墓



第32図 神手遺跡 6号竪穴住居跡実測図



第33図 神手遺跡 6号竪穴住居跡出土遺物実測図

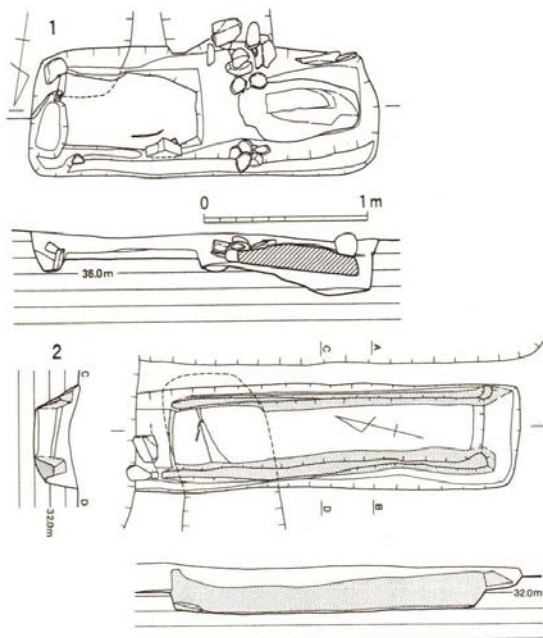
と並行して設置されている。床面は長さ一・九七<sup>メートル</sup>、幅〇・三七<sup>メートル</sup>で、墓壙の深さは〇・三一<sup>メートル</sup>である。長辺の両側壁で粘土が帯状に検出されたことから、割竹形木棺の可能性が考えられている。床面からは赤色顔料と鉄製品が発見された。

**遺跡の性格**

神手遺跡の性格を考える場合、弥生

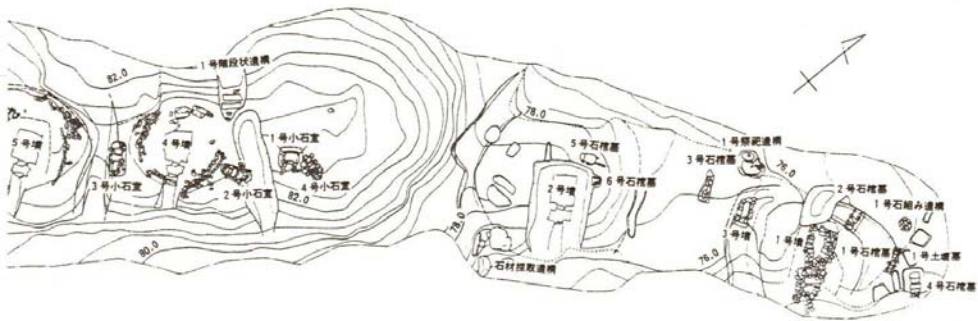
時代前期後半から中期前半にかけての時期と、後期後半を中心として古墳時代初頭にまたがる時期との二つの時期に分けて考えなければならない。

前期後半から中期前半にかけての時期は、2号・4号の一連の溝状遺構で囲まれた環濠集落としての性格を示している。この集落は、主として貯蔵穴と円形竪穴住居跡とから構成されたと推定されるが、確実な住居跡は確認されていない。貯蔵穴の形態については、同時期の京都平野の拠点集落の一つである行橋市下稗田遺跡と同じく、床面がすべて円形をなす点が、一つの地域色を示す。



第34図 神手遺跡 1. 1号石棺墓  
2. 8号土墳墓実測図

第35図 北垣遺跡全体図



次に、後期後半を中心とした時期では、集落としての性格と墓地としての性格がみられる。各遺構の分布状況を見ると、集落を構成する方形竪穴住居跡が調査区全域に広がるのに対して、墓地の埋葬施設のうち成人墓は調査区南部に集中する傾向がある。方形竪穴住居跡の構造は、基本的に床面が長方形の平面形態をなし、中央部に炉を設け、その両側に計二本の主柱穴を配し、長辺の一辺の中央部に屋内土壙を持ち、長短辺の一部にベッド状遺構を伴う。

##### 五 北垣遺跡

北垣遺跡は豊津町の南端で、祓川の西側の丘陵上に位置する。松と広葉樹と一部に竹が自生する雑木林であるこの丘陵は、頂上部では標高二〇五メートルを計り、東側の眼下には祓川の沖積平野が広がっている。遺跡が所在する尾根の最高部は標高九五メートル、尾根線上の低い部分でも七五メートルを計り、平野部と